

「オネエ所長の調査ファイル」 # 3 2

山崎浩治

「女装は魔法の呪文。ビビディ・バビディ・ブーと唱えれば貧しい少女がお姫様に変身するように、あたしも変身して美しい女になるの」

「おっさんが変身したのはシンデレラというより、お供のトカゲの方だけだな」

「意地悪ねえ。サオリはこのごろ、シンデレラの継母に似てきたわよ。だけど美しいお姫様には意地悪な継母がつきもの。あたしは健気に生きていくわ」

「意地悪なのは継母だけじゃありません。口減らしでヘンゼルとグレーテルを捨てたのは、継母になってる物語もあるけど、もともとは実母だったらしいわよ」

「案外、実の親が一番怖かったりしてね」

「金沢プライベート・リサーチ」の事務所でオネエ所長の市山とツンデレ調査員の沙織が雑談していると、大学生のつぐみ(20歳)が訪ねてきた。シンプルな洋服に身を包んだ聡明な顔立ちをした女性だ。彼女がアルバイトしているコンビニに夜遅くやってきて、何時間も過ごす小学生の女の子がいる。「ネグレクトされているんじゃないかと心配だから調べてほしい」という依頼だった。市山が尋ねた。

「あなたはどうしてその子がネグレクトされてると思うの？」

「昔、親に虐待されてた同級生がいたんです」

ためらいがちにつぐみが口を開く。緊張のせいか、しきりに前髪を気にしている。

「コンビニの店長に相談したんですけど、他人のプライバシーには踏み込んじゃいけないって」

「虐待を受けたと思われる子どもを発見した者は速やかに児童相談所や福祉事務所に通告しなければならない。これはすべての国民に課せられた義務よ」

「私の思い違いだったら困るので、ここに来たんです。前にその子に『大丈夫？』って聞いたら、『大丈夫』って答えたこともあるし。もし虐待じゃなかったら、その子の親だって迷惑ですよ。これって私のお節介なのかな」

表情を曇らせたつぐみに、市山が言った。

「でも何もしないまま、その子に何かあったらどうするの？」

◇ ◇

「さて、そこで問題がある。あたしたちは慈善事業をやってるわけじゃない」

「お金なら用意してきました。貧乏学生なので多くは払えませんが……」

「あなたは見ず知らずの子どものために、バイトで稼いだ自分のお金を使うわけ？」

「はい」市山の目をまっすぐ見据えたつぐみが言下に答えた。

「貧乏学生から大儲けするつもりはないわ。それじゃ、こうしましょう。今度、あなたがアルバイトしているコンビニに行った時、ガリガリ君アイスをおごってちょうだい。調査料はそれで手を打つ」

「おい、おっさん！ それはいくらなんでも安過ぎるぞ」

二人のやりとりを黙って聞いていた沙織が思わず口をはさみ、つぐみが悲しそうに目を伏せる。沙織がそっけなく言い添えた。

「ガリガリ君はせめてプレミアムにしてくれ。でなきゃ割が合わない」

調査の結果、少女の名は美由(13歳)と分かった。小柄な体格で小学生のように見えるが、中学1年だった。しかし小3から不登校で、今春入学した中学にもほとんど通っていない。アパートで同居している母・菜々子(30歳)が働いている形跡はなかった。中学が夏休みに入ったある日、市山と沙織が美由の暮らしぶりを調べるため張り込んでいると、昼前にアパートから出てきた美由はこれといった目的もなく、ショッピングセンターや公園をぶらついていていた。

「あの子、真夏なのに長袖シャツを着てる。シャツの襟や袖口は垢で真っ黒だし、運動靴には穴が空いてる」

陽が落ちてきた公園の砂場で一人遊びしている美由を離れた場所から見つめる沙織が言った。タンクトップとミニスカートで女装した市山もうなずく。

「それに昼前から何も食べていない。虐待は状況証拠的に真っ黒ね」

「児童相談所に通報しなきゃ」

「その前に彼女の話聞いてみましょう」

美由に近付いた市山が「こんにちは。ちょっといい？」と声をかけた瞬間、美由が「不審者！」と鋭く叫ぶ。市山が思わず吹き出した。

「ご挨拶ねえ。でもまあ、女装してるあたしは見るからに不審者よね。それは否定しない。あたしが危険だと思うなら助けを呼びなさい。そこにいるお姉さんが助けてくれるわ。助けを求めることは恥ずかしいことじゃない」

市山と沙織を見比べる美由の表情に、警戒の色が浮かんでいる。

「ねえ、一つだけ教えて。子どもが何かつらいことがあった時、いつでも安心して帰ることができる場所、それがおうちよ。そんなおうちがあなたにはある？」

その時、美由の瞳から涙があふれた。何日も顔を洗っていなかったのだろう、その涙は真っ黒だった。

◇ ◇

ママは17歳の時に結婚した。バイト先で知り合った20歳のパパと付き合っ、美由を産んだのだ。結婚式も新婚旅行もしないまま、ママとパパは一緒に暮らし始めたけれど、結婚生活は1年も続かなかった。パパが突然、帰ってこなくなったからだ。

離婚の原因は、美由の夜泣きらしい。ついでに言えば、妊娠したママが高校を中退したのも、パパが養育費を送ってこないのも、ママの仕事が長続きせず生活保護を受けているのも、みんなみんな美由のせいだとママはいう。

小学校の時、クラスみんなが美由のことを「臭い」と騒いだ。何日もお風呂に入っていないので、それは本当のことだった。「いつも同じ服を着ている」「夏なのに冬服を着ている」とも笑われた。それも本当のことだ。

やがて学校へ行こうとすると、お腹や頭が痛くなり、何日か休んでいるうちに学校に行けなくなった。ママは怒るかと思ったけど、「給食費を払わなくて済む」とむしろ喜ぶ。美由がお腹いっぱい食べられるのは給食だけだったのに。

ママは、「うつ」という病気だ。調子がいい時は仕事を探しに行けるけど、体調が悪くなると、うつのお薬とお酒を飲んで布団のなかで何日も過ごす。そんな時、美由はママが元気になるまでお腹が空いているのを我慢しなければならない。でも、部屋にいられるだけ、まだいい。「美由がそばにいと、うつがひどくなるんだよ！」と怒られ、外に追い出されることもしょっちゅうだからだ。

部屋にいられない時は近所のコンビニやスーパー、公園で時間をつぶす。ある時、お腹が空きすぎてコンビニでパンでも万引きしようかと考えていると、心配そうな顔をしたお店のお姉さんが「大丈夫？」と声をかけてくれた。びっくりして「大丈夫」と答えたけれど、全然大丈夫じゃなかった。でもその時、とてもうれしかったことを覚えている。

学校に行かなくなった時、先生が何度かうちに来た。けれど「娘はいじめられて学校に行けなくなった。いじめたヤツを呼んで土下座させろ！」とママが怒鳴るので、いつしか誰も訪ねてこなくなった。美由が昼間や夜遅く街をぶらぶらしていても誰も不思議に思わない。世の中の人には、きっと美由のことが見えていないのだろう。

だからコンビニのお姉さんが声をかけてくれた時、こう思ったのだ。美由のことが見えている人がいるんだ。美由は透明人間じゃなかったんだ、と。

◇ ◇

市山の連絡を受けた児童相談所の職員が状況確認のために美由のアパートを訪ねると、異臭が立ちこめた室内にはゴミが詰め込まれたポリ袋がいくつも散乱し、足の踏み場もない状態だった。職員が暮らしぶりを尋ねたところ、菜々子は「あの子がいると働けない。育てていく自信がない」と取り乱して泣き出す。その場で保護された美由は、ただちに一時保護所に移された。その後、「生活を立て直すまで美由を引き取れない」と菜々子が訴え、児童養護施設に入所することになった美由はいまもそこで暮らしている。

「金沢プライベート・リサーチ」にやってきたつぐみに、市山が報告している。

「美由ちゃんは中学生なのに、漢字はほとんど読めず、九九もできなかったそうよ。小3からほとんど通学していないから無理もないけどね。いまは児童養護施設から元気に学校に通っているわ」

「あの子、そんなに大変だったのに、私には何も話してくれなかったんですね」

「話せば、親の悪口になる。自分の親の悪口を言いたがる子どもはいないわ」

「私をもっと早く気付いてたら……」

唇を噛んだつぐみに、市山が告げた。

「美由ちゃんがコンビニに行ってたのは、あなたがシフトに入っている時だけだったこと知ってた？」

「え、そうなんですか？」

「虐待は家庭という密室で起こるから発見しづらい。美由ちゃんの場合、不登校も加わった上、たまに声をかけてきた大人を『不審者』呼ばわりしてたから、さらに周囲から見えにくくなってたの。でも、あなたには見えていた。誰も気にもとめなかった彼女のSOSに、ちゃんと気付いてた。美由ちゃんはそれを知ってたから、あなたのいる日だけ、コンビニに足を運んでたのよ。彼女にとって、あなたのいるコンビニが避難場所だったのかもしれない。そういえば」

思い出したように市山が付け加えた。

「あなたが言ってた『昔、親に虐待されてた同級生』って、自分自身のことでしょ？」

◇ ◇

「あなたのおでこの傷跡、たばこを押しつけられた跡よね？ いつも前髪を気にするから気付いちかった」

「探偵さんはさすがに目ざといですね」

つぐみが前髪をかき上げ、額を見せる。そこにはケロイド状の小さな火傷跡があった。

「酒癖の悪い父はお酒を飲んで暴れ、母や私に暴力を振るいました。この傷跡は父につけられたものです。自営の仕事がうまくいかず、鬱憤が溜まっていたんでしょうね。母が私を連れて逃げ出して、離婚が成立したのは中学の時でした。もう殴らなくて済むと思うと、ほっとしたものですよ」

「それであなたは美由ちゃんを見た時、ネグレクトされてると思ったのね」

「あの子を見た時、昔の自分を思い出しました。虐待されてる子って悲しいことやつらいことを感じないようにしてるから無表情になるんです。私も昔、能面のような表情だったって母が言ってました。そんな私を見て、母は離婚を決意したんです」

「お母様はいま、お元気なの？」

「離婚後、仕事先で知り合った人と再婚しました。新しい父は神様みたいに優しい人ですよ。不思議ですよ、実の父親より、継父の方がずっと優しいんだから」

半分だけ血のつながった弟が生まれ、つぐみは大学進学を機に一人暮らしを始めたのだそうだ。

「父にいろいろ気を使わせるのも悪いですしね」

屈託なく笑ったつぐみが引き上げていった。

一方、美由は数カ月に一度、養護施設に面会に訪れる菜々子に「ママと早く一緒に暮らしたい」とせがんだ。やがて就職した菜々子が職場で知り合った男性と再婚、弟と妹を立て続けに産み、施設に「美由を引き取りたい」と申し出たのは、それからさらに数年後のことである。幼い弟妹の面倒を美由に見させたいという思惑が明らかだったものの、美由は大喜びして母が新たに築いた家庭に引き取られていったという。その後の美由の消息は分からない。